

九大の歴史・今後の課題と展望

折田 悦郎

はじめに

本文では、九州大学（以下、九大）における自校（史）教育の実践と課題について概論するが、先年の立教大学における基調講演や、今回の「事例報告」との重複があることをまずはお断りしておきたい。

九大での自校（史）教育の試みは、今から約10年程前の1997年後期に始まった。国立大学としては最初の試みで、先発私立大学の立教大学、明治大学、関西学院大学等の事例を参考にさせていただいた。担当教員は筆者一人。授業の形態は少人数ゼミ、タイトルは「九州大学の歴史」（以下、「九大の歴史」というものだった。九大独自のプロジェクト（3年間の研究費が支出される）で試行的に実施したことも、後述する自校（史）教育を始めた当時の九大の雰囲気を知る上では参考になるかもしれない。

1999年度からは「大学とは何か—ともに考える—」を総合科目として開講したが、これは「九大の歴史」のアンケート調査で「よりグローバルな大学史・大学論の授業を望む」という要望があったからである。このように九大の自校（史）教育は、少人数ゼミと総合科目の二本立てで行われたが、この形態は一時期（2004年～07年の間は、両者を統合して総合科目「大学とは何か—九州大学を通じて考える—」として実施）を除けば、基本的には現在でも同様である。

授業の内容・工夫

ここで最新（2008年度）の「九大の歴史」「大学とは何か」の講義テーマとその担当者を掲げる。

I 2008年度後期「九州大学の歴史」

担当：折田悦郎（金曜5限目）

- 第1回 オリエンテーション（六本松キャンパス見学）
- 第2回 高等教育制度史概説1
- 第3回 高等教育制度史概説2
- 第4回 高等教育制度史概説3
- 第5回 九州大学前史（福岡医学校・福岡県立病院・京都帝国大学福岡医科大学）
- 第6回 九州帝国大学の創設（工科大学の創設）
- 第7回 農学部の創設
- 第8回 法文学部・旧制福岡高等学校
- 第9回 映画「ダウンタウン・ヒーローズ」鑑賞
- 第10回 福岡県下の高等教育機関（西南学院高等学部・福岡女子専門学校・明治専門学校・九州医学専門学校・九州歯科医学専門学校等）
- 第11回 映画「北辰斜にさすところ」鑑賞
- 第12回 理学部・戦前期の学生生活（学徒動員）
- 第13回 薬学部・歯学部・戦後期の学生生活・学生運動
- 第14回 九大の現況

II 2008年度前期「大学とは何か—ともに考える—」（水曜5限目）

- 第1回 はじめに（全体の趣旨）折田悦郎大学文書館教授
- 第2回 大学の歴史 吉岡斉比較社会文化研究院教授
- 第3回 私立大学及び専門学校の歴史的役割 新谷恭明人間環境学研究院教授
- 第4回 国際的視点からみた日本の大学 吉岡斉比較社会文化研究院教授
- 第5回 高等教育制度史概説 折田悦郎大学文書館教授
- 第6回 帝国大学の歴史的役割と九州帝国大学 同上
- 第7回 地域社会と大学—九州大学の場合を主として— 三輪宗弘附属図書館付設記録資料館教授
- 第8回 キャンパス見学 折田悦郎大学文書館教授
- 第9回 世界の高等教育改革と日本の大学—変容する大学の役割— 小湊卓夫高等教育開発推進センター准教授
- 第10回 データから浮かび上がる九州大学 同上
- 第11回 大学の研究戦略 上瀧恵里子研究戦略企画室准教授
- 第12回 大学と留学生 白土悟留学生センター准教授
- 第13回 大学とキャンパス空間 山野善郎非常勤講師（建築史塾 Archist）

上には最新の授業のテーマ等を挙げたが、10年に及ぶ自校（史）教育の間には、寺崎昌男、中山茂の各先生、総長・副学長・名誉教授の方々を招いた招待講演やシンポジウムを開催し、また学生達の感想（『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』、1999年3月。『試行授業「大学とは何か—ともに考える—」の記録』、2000年3月）、2年後の追跡調査（同左）等の報

告書を刊行、九大に関係したビデオ鑑賞や、箱崎地区、六本松地区のキャンパス見学も行った。これらの活動のうち、やはり一番重要だったと思われるのは「大学とは何か—ともに考える—」の講師陣で、教科書『大学とはなにか—九州大学に学ぶ人々へ—』（新谷恭明・折田悦郎編／海鳥社／A5判 258ページ／2002年3月）を製作・販売したことである。

教科書の出版はマスコミからも注目され、当時の総長からは第1回九大総長賞を授与された。また大学文書館自体について言えば、学内での立場をより強化できたのも、この教科書の刊行によってであった。

授業を始めた理由

ところで、以上のような自校（史）教育を始めた理由は、九大自体の歴史と密接に関連している。九大の前史は、明治10年代の福岡医学校にまで遡るが、直接には明治36年（1903）の京都帝国大学福岡医科大学という京大の分科で始まり、これを統合する形で8年後の明治44年（1911）に新設の工科大学が置かれ、九州帝国大学となった。医科と工科という巨大なキャンパスが離れて存在し、創立記念も大学全体のものより医学部の方が8年早く挙行される。創立以来、医工両科による“本家”争いの事例が知られ、また現在では九大全体でキャンパスが7つに分散している。その結果、いわゆるアイデンティティーの欠如等が、10年前の教員間で問題となった。キャンパス移転を控えた大学としては、まず自分達のいる“場”としての大学について「知る」ことが重要なのではないか、歴史を振り返り、そこから改めて出発することが必要ではないか。このような（危機）意識が、特に大学アーカイヴズに関係する人達

に強く共有されたことが、九大における自校（史）教育開始の最も大きな理由だった。こう言えば、必ず「愛校心の植え付けではないのか」という反論が予想されるが、極論すれば、それはキャンパス分散・移転というような状況に陥ったことのない所からの感想であろうと考え、これ以上は立ち入らない。ただ九大での理由が、建学の精神に注目し、自らの大学を近代史の中に正確に位置付けようとする先行私学の自校史教育とは異なるものであったということだけは、ここでも確認しておきたい。

学生の反応等

「学生の反応」については、上記のように報告書にまとめたり、毎回必ず、授業の最後に「感想」や「レポート」を書いて貰ったが、良かった点と改善点の内容そのものについては、最近のアンケートと約10年前のものともほとんど差違が無い。

「九州大学の歴史」に対する感想（1999年3月）

良かったと思う点

- ・自分の大学の歴史を知ることで九大に愛着がわき、誇りが持てるようになった。
- ・毎回資料や写真が配布され面白かった（特に写真）。
- ・九大の歴史だけではなく、福岡の歴史や他大学の歴史、旧学制についても学べた。
- ・箱崎キャンパスの見学は良かった。建物等を直接見て学習出来、講義内容がより身近に感じられた。

しかし、今回の「事例報告」でも述べたように、「九大の歴史」「大学とは何か」ともに大幅な受講生の減少が見られ、その理由として、①教員の側の“熱意”の問題、②学生の側の変化（「とも

に考える」より「情報」を得ることへのシフト）、③教える側の多忙な状況等を挙げた。受講生の減少は「学生の反応」としては大きな要因であり、同時に課題でもあるので、次にはこの点に関連してもう少し見てみることにしよう。

今後の課題・展望

今回の「自校教育の到達点と今後の課題」の「事例報告」の前日は、たまたま今学期の「九大の歴史」の最後の授業であり、従来よりも詳しく「学生の反応」のアンケート調査を行った。受講生は20名と少人数であったが、1コマ分を授業の「感想」と、それから「学生による授業アンケート」（高等教育開発推進センター自己点検・評価委員会作成）を用いての調査（いずれも匿名）に当たった。自由表記の感想で、良かった点と改善点は以下のようである。

良かった点

- ・他の講義（一般教養や言語など）のように、自分自身のスキルが上がった感じはしなかったけれど、例えば就活などで自分の大学について尋ねられた時などに、堂々と語れる力と自信は身につきました。
- ・普段の授業とは違った気分で受けられた。意外な知識を得た。
- ・六本松が最後なので、六本松についての歴史が知れて良かったと思う。
- ・何となくだけど、雰囲気よかった。

改善点

- ・理解度を把握して授業を進めてほしい。
 - ・プリントが多すぎて、どの話をしているのかわからない時があった。
 - ・最近の話をもっと聞きたかった。
- このような感想であったが、前述の

ように自分の大学に誇りを持てるようになったというような感想（今回は省略）は、10年前とほとんど変化がない。

次に、今年度前期に開催した「大学とは何か」の『学生による授業アンケートのデータ一覧』（高等教育開発推進センター自己点検・評価委員会。平成20年12月作成）には、これも少人数(15名)ながら当該授業への学生の「反応」が見られる。「授業に対するあなたの認知」の項目では、「教師に学び続けている者の姿勢を見た」（5段階評価の4.6）が最も高く、本授業の平均も4.4と全学の3.7を上回っている。一方、「改善点」として「授業内容の精選」（8.3）、「学生を軽蔑しないでほしい」（8.3）、「成績評価基準をきちんと示してほしい」（16.7）、「休講予告をきちんとしてほしい」（16.7）といった要望があり、全体の要望点は全学平均の60.4に対して100（この数字は回答頻度の割合の合計で100を越える場合がある。高値ほど要望度が高くなる）と、かなり高い数値となっている。

因みに、後期に実施した「九大の歴史」についてはまだ全学のデータが公表されていないため、「九大の歴史」に限って数値化すると、「授業に対するあなたの認知」の項目では、「授業準備の周到さ」「教師に教えようとする熱意があった」「教師に学び続けている者の姿勢を見た」の、それぞれ4.6を最高に平均4.2。「改善点」は31.3となり、一人で行う少人数ゼミと、リレー講義にならざるをえない総合科目との差が現れている。学生による授業評価はまだ問題点が多いとの指摘もあるが、「学生を軽蔑しないでほしい」（8.3）というのは、当然ながら良い傾向ではない。受講生減少の理由の一つが、やはり教員の意識や総合科目運営上の問題にあることを示唆するデータであろう。その意味では、「大学とは何か」を他の総合科目

（自校教育科目、例えば「事例報告」でもふれた「伊都キャンパスを科学する」等）と統合し、自校史は「九大の歴史」に特化するという方法もありうるかもしれない。しかしいずれにしろ、新しい『教科書』の編集・改訂は緊急の課題である。

予定の紙数を超過した。お詫び申し上げますとともに、残りの課題については別の機会に譲ることにし、本文はここで閉筆させていただきたいと思う。

おりた えつろう

（九州大学大学文書館教授・
同大学大学文書館大学史料室長）